

「主体的な学び」を実現する 授業づくり

—その組織的な実践に必要な視点とリーダーシップ

開催レポート

2024年11月26日（火）に、VIEWnext 高校版10月号 特集テーマ連動オンラインセミナー「『主体的な学び』を実現する授業づくり — その組織的な実践に必要な視点とリーダーシップ」を開催いたしました。2校の校長が実践の工夫とリーダーシップについて熱く語ったその模様をレポートします。

概要
※敬称略

◎日時 2024年11月26日（火）15時30分～17時00分 ◎形式 オンライン

◎プログラム

【第1部】特集解説

「主体的な学び」の実現の鍵を握る「自己調整学習」とは VIEWnext 編集部 統括責任者 柏木 崇

【第2部】校長座談会

「主体的な学び」を実現する授業を組織的に実践するための管理職の視点とアクション

岩手県立水沢高校 校長 寒河江 和広

東京都立多摩高校 校長 上村 礼子

VIEWnext 編集部 統括責任者 柏木 崇

岩手県立水沢高校 校長

寒河江 和広

以前勤務していた岩手県教育委員会では、学力授業力向上担当として県内の中学校と高校を毎日のように訪問。授業参観や助言を行った教員数は850人を超える。2023年度に校長として赴任した現任校は、教諭としても勤務経験があり、現在、学校全体での授業改善に取り組んでいる。教諭時代の担当教科は英語。



東京都立多摩高校 校長

上村 礼子

公立中高一貫校での副校長の経験を経て、2023年度に校長として赴任した現任校では、動画を活用した「自己調整学習」の推進や、進路学習における探究学習の導入など、「授業が分かる、学びたくなる」をスローガンに学校改革を進めている。2024年より日本理化学協会会長。教諭時代の担当教科・科目は理科・化学。



第1部 特集解説

「主体的な学び」の実現の鍵を握る「自己調整学習」とは

冒頭、VIEW next編集部 統括責任者の柏木崇が開会挨拶と本日のプログラムの説明をした後、第1部の特集解説を行った。

「現行の学習指導要領が実施されて2年半が経過しましたが、学校現場からは、特に『主体的な学び』の実現に苦慮しているという声が多く聞かれます。また、『主体的な学び』に深く関連する『主体的に学習に取り組む態度』の評価に高い課題感が示される傾向も続いています。



『主体的な学び』と『主体的に学習に取り組む態度』は、文部科学省等からそれぞれについての説明が示されていますが、学校現場におけるそれらの解釈が、教師によって異なるケースが見られることから、『主体的な学び』や『主体的に学習に取り組む態度』について、教師間で共通理解を図る際に鍵を握る学びとして、『自己調整学習』に着目しました」と、『VIEW next』高校版10月号の特集のテーマを自己調整学習とした背景を、まず説明した。

さらに柏木は、特集で紹介した九州大学大学院 伊藤崇達^{たかみち}准教授の解説を引用しながら、「自己調整学習とは、生徒が自分の意思を持って学習に取り組み、その見通しや計画を立てて調整しながら前に向かっていく学びです。生徒自身が学習計画を立て、自分に合った教材や学び方を選択して、自分のペースで学びを進める『自由進度学習』も自己調整学習の1つです」と解説した。

自己調整学習を成立させるためには、①動機づけ、②学習方略、③メタ認知の3つの要素が必要で、自己調整学習が成立している時には「予見」→「遂行／意思コントロール」→「自己省察」から成るサイクルが回っている状態となる。柏木は、特集で紹介した長崎県立諫早高校の後田康蔵^{いさはや うしろ だこうぞう}先生（物理）の、反転学習と自由進度学習を組み合わせた物理の授業においても、単元の1コマ目で、同単元で取り組むプリントの一覧をタブレット上で示し、生徒にその単元の学習計画や評価規準について見通しと明確な目標を持たせた上で（予見）、小単元ごとに設定された問いの答えを1枚の用紙に論述してまとめ、単元全体の理解の深まりをストーリーのように書き出す「ワンペーパーポートフォリオ」に取り組みさせることで、生徒が自分の状態を俯瞰し（遂行／意思コントロール）、プロセスを振り返る（自己省察）ができるようにしていると解説した（写真1）。

自己調整学習における教師の役割を、柏木は「入念な準備」「個別支援」の2つに整理した。

入念な準備の1つが、生徒自身に選択・調整させる「学習を構成する要素（どのような学習内容を、誰と、何を使って、どうやって、どのくらいの時間で学ぶか、など）」をどれにするかを、教師が明確化することだ。また、生徒が選択・調整できる学習コンテンツを前もって準備することも、教師に求められる。

個別支援については、机間巡視などを通じて生徒一人ひとりを見取り、学びを促進する働きかけを行ったり、生徒からの質問に丁寧に答えたりするといったことが挙げられた。そして、その具体例の1つが特集で紹介した東京都立多摩高校の石川幸佑^{いしかわ こうすけ}先生（世界史）の実践で、石川先生は、理解できない部分があるとすぐに手が止まってしまう生徒に、「一緒に読んでみようか」「どちらか1問でもやってみようよ」と、少しでも手が動くような声かけをし、学習を進められている生徒には、「もうそこまでできたんだ。早いね」などと褒めるようにしていると、柏木は説明した。さらに具体例の1つとして、三重県立松阪工業高校の中村智宏^{なかむら ともひろ}先生（英語）の実践を挙げ、中村先生が自己調整学習のコンテンツの多くをタブレット上で取り組みさせることで、生徒一人ひとりの学習状況をつぶさに把握し、つまづきを早期に発見して指導していることを柏木は伝えた。

以上のような識者の解説、授業実践を踏まえ、「自己調整学習を授業に取り入れることで、『主体的な学び』がより実現しやすく、『主体的に学習に取り組む態度』がより評価しやすくなるのではないだろうか」と第1部の特集解説を結んだ。

以上のような識者の解説、授業実践を踏まえ、「自己調整学習を授業に取り入れることで、『主体的な学び』がより実現しやすく、『主体的に学習に取り組む態度』がより評価しやすくなるのではないだろうか」と第1部の特集解説を結んだ。

9 「自己調整学習」とは、どのような学びか？

自己調整学習のサイクルが回っている状態

- 予見/意思コントロール
 - 自分の状態を把握できる
 - 学習方略を設定できる
 - 自分のやる気を喚起できる
- 予見
 - 明確な目標がある
 - 興味や関心がある
 - 興味や関心がある
- 自己省察
 - プロセスを振り返る
 - 結果を元にした学習を分析する
 - 次のサイクルにつなげる

【事例】長崎県立諫早高校 後田康蔵先生（物理）

1コマ目

- 単元で取り組むプリントの一覧をタブレット上で示し（図1）、生徒にその単元の学習計画や評価規準について見通しを持たせる。
- 【予見（明確な目標がある）】

●単元を通して考える問いが書かれたワークシート（図2）を配布。ワークシートに書かれた問いは日常生活と深く関連しているが、単元を学習していない生徒にとっては、1コマ目では正解にたどり着けない内容になっている。そのため生徒たちは、その問題が解けるようになることを目指して、その後の学習に取り組む。

【予見（興味や関心がある）】

写真1 特集で紹介した事例を基に、自己調整学習がどのような学びであるかを解説した。

13 「自己調整学習」における教師の2つの役割 - ② 個別支援

●机間巡視等を通じて、生徒一人ひとりを見取り、学びを促進する働きかけをする。

●生徒一人ひとりの質問に丁寧に答えるなど、個別支援に注力する。

【事例】東京都立多摩高校 石川幸佑先生（世界史）

理解できない部分があるとすぐに手が止まってしまう生徒には、「一緒に読んでみようか」「どちらか1問でもやってみようよ」と、少しでも手が動くような声かけをし、学習を進められている生徒には、「もうそこまでできたんだ。早いね」などと褒めるようにしています。

【事例】三重県立松阪工業高校 中村智宏先生（英語）

自校調整学習のコンテンツの多くがタブレット上で取り組むことができるため、生徒一人ひとりの学習状況をつぶさに把握でき、つまづきを早期に発見して指導しています。

【事例】長崎県立諫早高校 後田康蔵先生（物理）

生徒に「この答えで合っているか」と問われた場合は、合っているか、間違っているかだけ答えず、「分らない」と質問された場合は、どこが分らないのかを尋ねた上で、答えを導き出すヒントとなる教科書の該当ページを示すなど、生徒が自分の頭で考えることを何よりも大切にしています。

生徒からの質問に丁寧に対応することができるようになったことで、生徒が言う「分らない」の中身が教師の想像以上に多様であることに気づきました。生徒に自分が何から分らないのかを説明できる力を育てることが重要だと感じています。

写真2 特集で紹介した3人の教師が、どのような実践を通じて自己調整学習における教師の役割を果たしているかを説明した。

「主体的な学び」を実現する授業を組織的に実践するための管理職の視点とアクション

寒河江 和広 岩手県立水沢高校 校長

上村 礼子 東京都立多摩高校 校長

柏木 崇 VIEWnext 編集部 統括責任者

続く第2部では、『主体的な学び』を実現する授業を組織的に実践するための管理職の視点とアクション」をテーマに、岩手県立水沢高校の寒河江和広校長と、東京都立多摩高校の上村礼子校長による校長座談会が、VIEW next編集部 統括責任者の柏木崇の進行で行われた（写真3）。

水沢高校は、普通科と理数科を設置する進学校であり、創立110年を超える自由な校風の伝統校だ。多摩高校は、普通科を設置し、生徒の多様な希望進路の実現を目指すとともに、心の育成にも力を入れる伝統校である。

座談会に先立って、「主体的な学び」を実現する授業を組織的に実践するために両校が行ってきたことが紹介された。

水沢高校は2024年10月25日、同校の生徒56人と教師14人、そして校外から参加した教師33人など、合わせて100人超が集まる対面イベント「生徒とともに創る！ 学習者主体の授業」を開催。生徒主体の授業に取り組んでいる教師による授業実践の報告と、水沢高校で生徒主体の授業づくりを進める若手教師による公開授業を踏まえて、生徒と教師が、授業で身につけたい力・育みたい力や、これから求められる授業のあり方について話し合った様子が動画で紹介された（写真4）。「教師と生徒がよりよい授業をともに創っていくために、自分に何ができるのかを考え、実践していく風土が学校に醸成されました」と、寒河江校長はイベントの手応えを語った。

多摩高校では24年度から、自由進度学習を取り入れた授業の実践に学校全体で取り組んでいる。「数学Ⅰ」の授業の様子が動画で紹介され（写真5）、生徒が単元の内容を見通すことができる

ように「学びのフローシート」を配布し、どのワークシートに取り組んでいけばよいかを一覧にして伝えたり、生徒自身が自分の理解度に応じて取り組むワークシートを決められるようにしたりするなどの、自由進度学習を実現させるための様々な工夫が紹介された。「本校は、生徒の基礎学力の定着が教科を超えた課題でしたが、校内研修の充実や互見授業などを通じて自由進度学習の導入が校内に広がる中、生徒も『分かった!』という実感を味わいながら、主体的に学習に取り組む力を身につけています」と上村校長は取り組みの成果を語った。

「主体的な学び」を実現する自由進度学習を取り入れるポイントとして上村校長は、「生徒が取り組む学習課題は、教師が生徒の実態に合わせて設定しながら、生徒を信じて生徒に学びを任せることが重要。そうした教師のスタンスがあれば、どの教科・科目でも、そしてどの学校でも、自由進度学習を取り入れることが可能です」と語った。寒河江校長は、「生徒が主体的に学ぶ自由進度学習は、大学以降の学びを考えると、学び方を学ぶと



写真3 岩手県立水沢高校の寒河江和広校長と、東京都立多摩高校の上村礼子校長が、VIEW next編集部 統括責任者の柏木崇の進行で、互いの実践について熱心に質問し合いながら、自校にも生かしたい実践の工夫や取り組みにおける苦勞を語り合った。



写真4 水沢高校が開催した対面イベント「生徒とともに創る！ 学習者主体の授業」の様子。生徒と教師がこれからの授業について語り合った。



写真5 自由進度学習を取り入れた多摩高校の数学の授業の様子。同校の授業においても、自己調整学習における教師の役割の1つである「個別支援」に力を入れている。

いう点で意義のあるものです」と語った。その上で、教師と生徒が授業のあり方を話し合いながら、一斉授業と自己調整学習のベストミックスを考えることも重要だと指摘した。

授業改善は一朝一夕に進むものではないからこそ、校内研修の工夫や、互見授業、公開授業、イベントなどの実施を通じて、まずは教師が自身の授業をよりよくしていくことに「ワクワク感」を抱き、授業改善への意欲やスキルを高めることが重要だと、2人の校長の意見が一致した。また、「主体的な学び」を実現する授業を組織的に実践するための管理職の視点とアクションとして、ミドルリーダーが動きやすい環境を整えること、授業に責任を持つ各教師の思いを尊重しつつ、管理職としてのビジョン、方向性を分かりやすい言葉、スローガンで示すことが、教師一人ひとりにそれらを浸透させる上でも大切であると、互いに共感していた。

対談の結びとして寒河江校長は、「答えが1つではない授業改善だからこそ、試行錯誤が必要ですし、校内はもちろん、校外も含めた教師同士のコミュニケーションがより重要だと考えています」と述べた。また、上村校長は、「地域の方々に始め、様々な方々に向けて学校を開いていき、多くの方々の声に耳を傾けながら、授業を含む教育活動を多角的な視点で改善していきたいと思います」と語った。

閉会の挨拶として、VIEW next編集部 統括責任者の柏木崇が、校長座談会を振り返った。具体的には、管理職に求められることとして、「自校ではこういう生徒を育てたい」といったビジョンを明確化した上で、「自己調整学習を授業に取り入れてみる」「生徒主体の授業について教師と生徒と一緒に考える場をつくる」など、それまでの自校にはなかった発想や取り組みを取り入れる柔軟性が一層求められることなどを確認した。

その後、答えが1つではない教育課題をテーマとして取り上げる『VIEW next』高校版の編集方針を説明した上で、今後も特集のテーマと連動したオンラインセミナーを実施することを予告し、本セミナーを締めくくった。

参加者の感想

学校の改善に向かうための管理職のアクションのポイントを知ることができた。

管理職からのトップダウンではうまくいかず、ミドルリーダーが動けるような環境整備を整えるのが必要という点には大いに共感した。ミドルリーダーとのコミュニケーションを通して、先生方が生き生きと過ごせるように努力したいと思った。

「主体的な学び」を学校全体で実現する際に必要となるキーワードがたくさん出てきて、とても貴重な体験だった。授業でも、HRでの指導でも、「主体的な学び」を実現する指導ができるチャンスがあることが分かった。そして、その指導の見直しや工夫を考えるポイントを学ぶことができた。

自己調整学習を取り入れている教師が、自分の想像以上に全国にいることに驚きと喜びを感じた。「もっと学びたい」とやる気が湧いてくるのと同時に、「このままではいけない」という危機感を持つことができた。

管理職として、改めて授業改善に取り組む意欲が高まった。

アーカイブ動画のご案内

本セミナーのアーカイブ動画をご視聴いただけます。下記のURL、または2次元コードからアクセスしてください。

<https://view-next.benesse.jp/view/web-hs/article30200/>

※視聴後、アンケートにご回答いただいた方には、本セミナー開催時のお申し込みの際に参加者の皆様から多くお寄せいただいたご質問をピックアップし、『VIEW next』高校版10月号・特集誌面にご登場いただいた4人の授業実践者の先生方にご回答をいただいた『VIEW next』高校版10月号・特集・授業事例 Q & A集』をダウンロードいただけます。



今後のセミナーのご案内

『VIEW next』高校版では今後も、管理職の先生方向けのオンラインセミナーを開催予定です。詳細は、『VIEW next』高校版や教育情報総合サイト『VIEW next ONLINE』(<https://view-next.benesse.jp/>)でご案内いたします。

